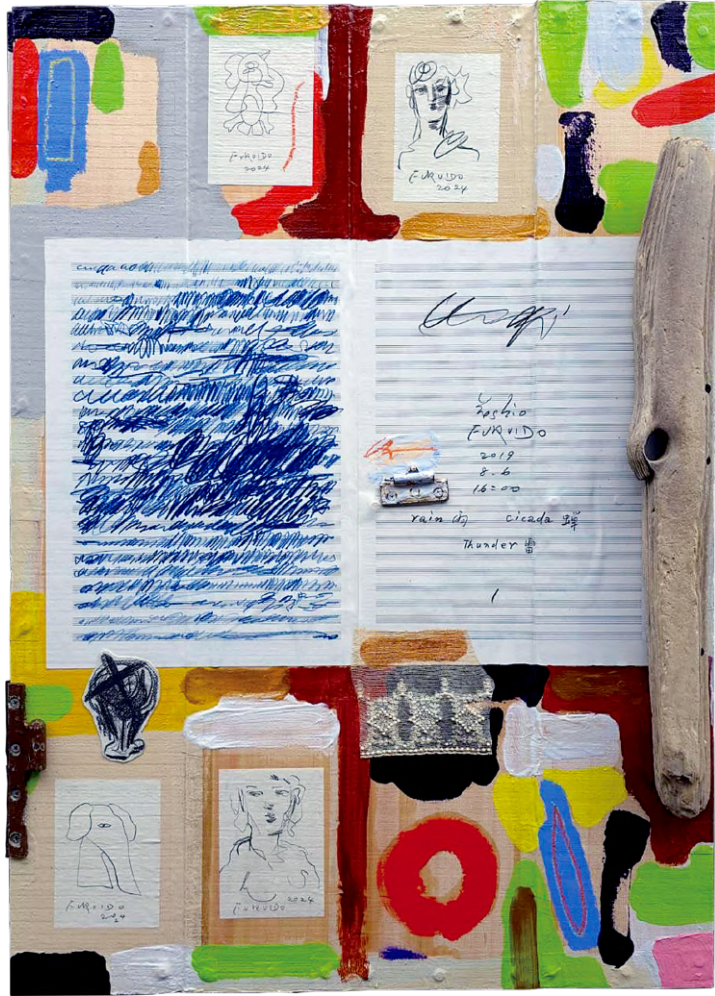


五線譜上の絵画 鈴木一史（小海町高原美術館 学芸員）



《森の精 音線物質運動体 雨、蟬、雷 16:00 8.6.2019（恵那アトリエ）》 2024 920×660×90mm

楽譜ドローイング、古い蝶番（イギリス製）、アンティークレース（イギリス製）、海の流木（城崎）、「森の精」デッサン・2024、天然木曽檜・板

音線物質運動体と名付けられる作品に貼られた五線譜。譜面には音符や音楽記号が記されるのではなく、抽象的なドローイングの線が引かれている。描線の動きは、音の高低を表す5本線に交わりながらジグザグと上下に躍動をみせ、時間を示す横軸に沿って進んでいく。紙やキャンバスという白紙の状態の支持体以上に、五線譜の敷かれた楽譜には音楽的な規律と法則が存在する。この五線譜上に古井戸が即興で引く描線が示すものは感受性の大小であり、リズムであり、そして時間である。これらの表現が調和する画面はまさに音を記録するための描画表現であり、環境の変化をなぞるドローイングは通常の絵画表現ではあり得ない“流れ行く時”をも視覚化させている。

《森の精 音線物質運動体 雨、蟬、雷 16:00 8.6.2019(恵那アトリエ)》という作品はその題名にも記されている様に、2019年8月6日の午後4時、古井戸芳生という人間が存在した場所に響く音環境の記録であり、アトリエで過ごす夏の一日の情景を直接的に写し出した楽譜としての一枚でもある。そこに記録されるのはささやかに聴こえていたのであろう雨音と、それに重なる抑揚ある蟬の鳴き声である。そしてこの2つの異なる音が連続して響く中、大きく変化をもたらすのが遠くから接近してくる雷の気配と緊張感。そして瞬間的に轟く雷鳴、嘶きの余韻を残しつつも再び静まっていく様までが記される。この時、作家が体験した出来事、特にその中心となる雷の発生と収束が一連のメロディのように譜面に書き起こされたと言ってもよい。また、おそらく予測しにくい雷の発生は、音に気がついて、聞いた音をなぞるのでは到底描画が追いつかないのではないかと。耳で聞くのではなく、環境の中心に身を置き、その限られた世界の音に全身で没頭する作家の様子が想像できる。音が空気を震わせるのを感じ取る作家の身体と、即興行為が成せるカリグラフィックは、地震計の針のように無意識、無機質に描き連ねられたに違いない。この楽譜で語られる叙事詩的事象は、ドローイングの速度、反復の振幅、筆記の濃淡という極めて単純な素描技術のみで描かれ、そこには作家個人の制作意図や創造性は必要ないのかもしれない。しかしこの瞬間、古井戸芳生という作家は自然の環境音を端的かつ純粹なまでのドローイングへと置き換えるアダプター（変換器）としての存在になることに徹し、その芸術行為をもって肌で感じる音の世界を視覚芸術としての絵画へと置き換えるということをやったのだ。

※ 本文は2025.1.13～1.19まで北九州市立美術館黒崎市民ギャラリー展示室1で開催された「2025「和」中日芸術展」のために寄稿された文章を、そのまま掲載させていただきます。